平成 30 年度航空機事故対処総合訓練報告

災害医療委員会委員長
沖縄県災害医療コーディネーター　出口　宝

事故機からの脱出と搬出

はじめに

平成 30 年 11 月 22 日（木）に那覇空港緊急計画連絡協議会ならびに国土交通省大阪航空局那覇空港事務所主催による平成 30 年度航空機事故対処総合訓練が開催されました。今年は総合訓練であり、那覇空港消火救難協力隊と那覇空港緊急計画に基づいて援助要請機関になっている 74 機関 341 名が参加しました。本訓練には、本会から田名常任理事、小職、業務 1 課職員が、そして浦添市医師会、那覇市医師会、南部地区医師会から救護班が参加しましたので報告します。

なお、今年度も本実動訓練に先立って 10 月 18 日に図上訓練が実施されました。図上訓練は空港北側で旅客機が着陸侵入中に滑走路手前約 200m の海上に墜落したとの想定で行われました。

訓　練

訓練は那覇空港西側エプロン 98 ～ 102 番スポットで、今年の 11 月に那覇空港に移転してきた全日本空輸の整備子会社である MROjapan の格納庫の前に位置するエリアで行われました。事故は、乗客 50 名を乗せた旅客機が那覇空港へ着陸寸前に風の影響で右翼が滑走路に接触、滑走路を逸脱して No.2 エンジンが炎上して緑地帯で機体は停止、火災が胴体付近にまで延焼し多数の負傷者が発生したとの想定でした。当日は JTA の B737 実機が用意されており、搭乗者が脱出するというところから本番と同様の設定で訓練が進められました（巻頭写真、Fig.1）。

Fig.1　訓練前の機内の様子

ここで、機内からの脱出の順番は基本的には歩行可能な者から先に脱出し、重傷者はその後からの救出となります（Fig.2）。その後、傷病者は集められて一次トリアージが行われ、赤と黄色は傷病者チェックポストでカウントされてから二次トリアージが行われた後、赤、黄のエリアで対処されました。緑に関しては一次トリアージ後にそのまま緑エリアに誘導されました。

Fig.2　歩行可能な軽傷者が脱出した後に機内から搬出される重傷者

二次トリアージと赤エリアと黄エリアはDMAT、緑エリアを浦添市医師会と那覇市医師会、黒エリアと検視を南部地区医師会が担当しました（Fig.3～5）。これらの役割分担は、当日の現場指揮所に医療班が登録した時に指示されて担うことになります。

赤と黄が病院搬送され、無傷病者と緑がバスにて空港ターミナルの待機所に移送され（救急車に収容、バスに乗車するところまで）、そして検死が終了して訓練は終了しました。

Fig.3　赤エリアで活動するDMAT

Fig.4　緑エリアで活動する浦添市医師会と那覇市医師会の救護班

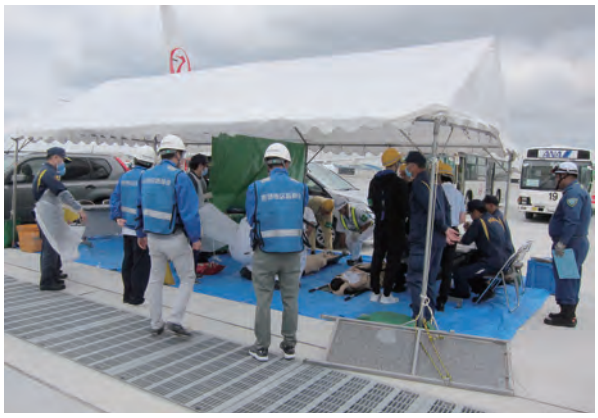


Fig.5　検視を行う南部地区医師会

所　感

航空機事故の多くは離着直後の3分間、着陸前の8分間に多く発生しているとされています。那覇空港でも3月には上海吉祥航空機による離陸に関する重大インシデントが、6月には琉球エアーコミューターによる着陸に関する重大インシデントが発生しています。また、那覇空港には離陸直後の高度に関する制限があるなどの特殊な運用ルールもあるようです。那覇空港は南側が瀬長島近くの海、北側が那覇港出入り口の海に位置しています。図上訓練も前回は着陸侵入中に南側の海上、今回は北側の海上に墜落したという想定でした。発生可能性のある事故を想定してシミュレーションしておくことは重要です。

今回の実動訓練では実機の中に模擬傷病者が搭乗しており、そこからの脱出から訓練が始まりました。前述したように、機内からの脱出と重傷者の搬出の優先順位や手順にしたがって訓練が行われたことは非常に効果的であったと思

われます。これは、事故機が見なし設定での訓練ではできず、今回のように実機を用いなければできない訓練でした。

さて、我が国の共用空港では、空港法により国際民間航空条約および国際民間航空機関（ICAO：International Civil Aviation Organization）の規程に準拠して、空港およびその周辺で発生する航空機事故等に備えて人命救助を目的とする消火救難体制を整備することが定められています。それに従い、那覇空港においてもICAO基準で空港緊急計画が策定され、同基準で救急医療資器材も配備されて本訓練が実施されるなど国際空港としての体制がとられています。

一方、那覇空港では国際線の乗り入れが増加している中で、2007年には中華航空120便における炎上事故も発生しています。このことからも、今後は、乗客乗員全てが外国人という設定での実動訓練をしておくことも重要になるのではないかと思われます。

本訓練は、那覇空港緊急計画連絡協議会ならびに那覇空港事務所や関係者のご尽力で、図上・実動訓練ともに回を重ねて実効性のあるものになってきています。今後も繰り返し訓練を重ねて対処能力を高めておくことが重要と思います。今後も会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

訓練参加者（一部）

印象記

常任理事　田名　毅

平成30年空港事故訓練の災害対策本部に参加して

私が災害救急担当理事になって毎年本訓練に参加していますが、沖縄赤十字病院の佐々木先生が医療関係のアドバイザーをされており、本訓練の前に行われた机上訓練も合わせて、毎年訓練内容が改善され実質的なものになっていると感じました。

今回私は那覇空港事務所6階危機管理室に設置された那覇空港航空機事故合同対策本部に沖縄県医師会の担当者として参加しました。

出口先生が参加された現場の臨場感とは違い、各関係団体の連絡・調整にあたるのが主要な任務です。現場の正確な情報をいち早く医療関係団体に伝え、それぞれの事象に対する対策を円滑にすすめる役割です。

今回は35名の赤タッグ（重症傷病者）が発生したので、受け入れ医療機関をあたってほしいと現場指揮所の担当者より私に連絡が来ました。その際に、空港近隣の医療機関、高速道路を使用しての広域搬送も念頭においた医療機関を検討し、7つの医療機関に5名ずつ受け入れを依頼し了解を得たという回答を考え、その後現場指揮所に報告しました。

今回はあくまで訓練なので仮想回答をしたわけですが、実際に航空機事故や災害による多数傷病者が発生した際には、まず県内の医療機関に「非常事態宣言」をする必要があります。通常業務、予定手術などで待機できる処置、手術は一旦実施を中止し、重症傷病者を受け入れる体制を構築する必要があります。その上で、今回のように各病院の受け入れ可能人数を迅速に把握し、救急搬送を手配する現場指揮所、消防通信部にその情報を提供するという対応が必要と考えます。

しかし、沖縄県ではこの「非常事態宣言」を誰が、どのように発令するか、まだ仕組みが出来ていないのが現状です。先日、日本医師会の災害救急委員会に参加した際に宮城県医師会の担当理事をされている登米先生にお聞きしたところ、宮城県ではこの宣言をする仕組みがすでに構築されているとのことでした。沖縄県でも医師会で開催される病院長会議、沖縄県と沖縄県医師会の連絡会などの場を活用して、必要時に本宣言が発令出来るように検討する機会を早急に作っていきたいと現在考えています。

第 126 回沖縄県医師会医学会総会

広報委員　久志　一朗

第 126 回沖縄県医師会医学会総会日程

会　期：平成 30 年 12 月 9 日（日）
会　場：沖縄県医師会館
ポスター掲示、準備、閲覧
第 126 回沖縄県医師会医学会総会開会宣言
第 126 回沖縄県医師会医学会総会会頭挨拶
一般講演　口演部門

ミニレクチャー
①座長：沖縄県立中部病院　本村　和久
講師：アドベンチストメディカルセンター家庭医療科
　　許　智栄
演題：「目指そう！プロアクティブな高齢者診療」

②座長：南部病院　城間　寛
講師：浦添総合病院　副院長兼看護部長　伊藤　智美
　　救急集中治療部　北原　佑介
演題：「看護師特定行為研修について」

特別講演（ランチョンセミナー）
座長：ぐしこどもクリニック　具志　一男
講師：国立感染症研究所　感染症疫学センター第 2 室長
　　砂川　富正
演題：「健康危機および経済問題としての輸入感染症
　　への対策」

一般講演　ポスター部門

沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）
沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）選考委員会
沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）受賞者発表
分科会長会議

平成 30 年 12 月 9 日に県医師会館において第 126 回沖縄県医師会医学会総会が開催されました。当日は、あいにくの小雨降る肌寒い日でしたが早い時間帯から多くの参加者で盛況でした。

砂川博司医学会長の開会宣言、竹井太医学会総会会頭挨拶の後、午前中は一般講演の口演部門、午後からはポスター部門の計 150 件の発表が行われました。急性期の疾患から難病、慢性疾患の検査や治療など幅広い分野での演題が発表されました。

ミニレクチャーでは、最初に「目指そう！プロアクティブな高齢者診療」と題してアドベンチストメディカルセンター病院 家庭医療科許智栄先生が講演されました。楽しく工夫されたプレゼンテーションのなかで、老年医療の特徴（「痛くない」、「熱はない」、「元気がない」）やエビデンスなどを教えて頂きました。老年医療は、医学的な側面だけでなく現代社会の問題点が反映され地域を巻き込んだ多職種との連携も重要であり、質問も多く活気ある講演でした。

続いて、「看護師の特定行為研修について」の演題で浦添総合病院伊藤智美副院長兼看護部長、北原佑介先生が講演されました。背景には、

これからの高齢化社会を見据え在宅医療等の推進を推し量るためには、手順書に従い自らの判断で特定行為が行える看護師の養成が絶対不可欠である事が前提にあります。沖縄県内では、3施設での主に呼吸器関連の研修が開講されているとの報告でしたが、次年度には更なる研修提供も予定されているとのことでした。これからは、看護師が特定行為を研修することでチーム医療の主軸となり、質の高い看護の実践者・指導者として患者と家族、地域に貢献することが十分に期待されています。

特別講演は、国立感染症研究所感染症疫学センター 第2室長砂川富正先生により「健康危機および経済問題としての輸入感染症への対策」のテーマでご講演頂きました。交通機関の発達で旅行が容易となり、多くの人々が移動する事に伴い、遠い外国の感染症も対岸の火事では済まなくなりました。水際での感染予防・対策に日々奮闘している様子も伺えました。講演内容は、現在の感染症サーベーランス紹介から始まり、多くの人々が参加するオリンピック・パラリンピックなどのマスギャザリング（MG: mass gathering）の感染症へ対応、観光立県としての沖縄県の感染症の予防と対策、過去に沖縄県でアウトブレイクした感染症（風疹、麻疹など）の背景、転帰、後遺症に関して詳細に報告されていました。今後注意すべきと思われる感染症として麻疹・風疹、侵襲性髄膜炎菌感染症（IMD）、中東呼吸器感染症（MERS）を主に挙げ、世界での発生状況、予防・感染対策について説明されました。平時からの対策の重要性、予防接種、診察のポイントなどを述べられ、我々、医療者は知識の習得と冷静・迅速に対応する能力を求められています。

今回の県医師会医学会は、分野別に区分され150件の演題が発表されました。当学会は、最先端の医療や最近のトピックの見聞、医療が抱えている問題点や難渋している症例などを互いの顔を付き合わせて論議、相談出来る良い機会でもあります。また、お世話になった先生の変わらぬ探究心に感心するとともに、同僚や後輩の発表を聞き自己研鑽する貴重な場でもあります。研修医が一生懸命に創り上げたポスター、ベテラン先生の長年の治療成績をまとめた発表があり、QOL（生活の質）やAPC（advanced care planning）を念頭においた日常生活の改善や維持に関連した内容が多く見受けられた印象でした。

医学会頭挨拶

第126回沖縄県医師会医学会総会会頭
竹井　太

第126回沖縄県医師会医学会総会の開催にあたりご挨拶申し上げます。

このたびは、愚考者で沖縄の歴史を知らぬ外来種のしかも離島医である私がこのような歴史のある県医師会医学会総会の会頭のご指名をいただきました事は身に余る光栄であると共に、安里哲好医師会会長、砂川博司医学会会長、はじめ会員の皆さまに心からの感謝を申し上げます。

私は大阪出身で1981年東海大学を卒業後、脳神経外科教室に入局し同大学大学院、アルバートアインスタイン医科大学での研究を経て、約20年間務めた大学を退職し、2001年に着任するまで一度も訪ねたことのなかった宮古島に移住してまいりました。来島当初は、当時宮古島で産声を上げたばかりの宮古徳洲会病院の院長として、2005年には沖縄県立宮古病院で不在となりました脳神経外科医として

勤務いたしました。この間、離島における官民の勤務医の経験を通して徐々に高まった地域医療医師としての使命感（？）から2006年に、医療法人たぶの木うむやすみゃあす・ん診療所を開設いたしました。2008年には沖縄県でははじめての医療福祉建築賞を頂き、2016年からは離島では国内初の認知症疾患医療センター連携型の指定を頂き、また、同年に宮古地区医師会会長の任を拝しました。現在は、地区医師会長として宮古島の健康寿命をいかに全国トップレベルまで引き上げるかについて検討を重ねているところです。

私のミッションの原則は、沖縄本島との連携を更に強固に保ちつつ、離島から発信できることをできる限り増やし、離島のアイデンティティーを高めることと決めています。その中で、いかにうむやす（安心、安全）で、みゃあすみゃあす（心がすっきり、ゆったりして）な医療環境を提供するかを考えています。このためには、住民の方に提供する情報をつねに私達が学術的にブラッシュアップをして最新情報を手に入れておくこと、また、住民への情報提供をその地の環境に合わせた形（多様性）に合わせて（これが重要です）届けるかを検討する事が必要不可欠です。しかし、いったん開業をしてしまいますと時間的な制限も多く、中々この事をクリアすることは困難である事が身にしみて理解できました。しかし、そこであきらめるとミッションは完遂できませんので、先ずはより多くの方に宮古島へ来島いただき、情報入手を少しでも簡単にできるよう、5年前から宮古島でこの時期に宮古島神経科学カンファレンス（MICONS）を開催させて頂いています。参加者は海外参加者も含め全国からお越しいただいており日本脳電磁波図トポグラフィ学会、日本薬物脳波学会、NU-Brainシンポジウムなどともジョイントカンファレンスを、また、その際には、前術したように多様性の育成を目的としておりますので地元の高校生の参加を募り、若い時に将来のための自己触発を行なえるようにしております。幸いなことにこの会に参加された生徒の中には、留学をするもの、琉大医学部に入り医師をめざすもの、准看護師志望であった生徒がこのような学会で発表できる正看護師になりたいと現在看護学校に通うものが出てきてくれていて頼もしく思っています。

さて、沖縄県医師会では現在までに最新医療情報のブラッシュアップを目的に精力的に活動されています。皆さんもご存知のように、その前進は1946年米軍占領下で設立された沖縄医療団から始まり、以降、1951年に設立された沖縄群島政府下での沖縄群島医師会、1953年琉球政府下での沖縄医師会、1972年の本土復帰に合わせて沖縄県医師会と改称され今日まで、沖縄の医療を支え続けて来られています。また、医学会活動も、それぞれの時代に合わせて活発に学術発表がされており、沖縄医学会（全19回、122題：一部不詳年度あり）、沖縄医療団医学会（全6回、120題）、沖縄群島医学会（全40回、696題）となり、現在では、沖縄県医師会医学会総会として今回126回の開催を迎えました。現在にいたるまでの発表総数は、第1回（1951年）から数えて13,161題にも及びます。この間、離島からの発表総数は98演題（確認ができた発表は第25回（1963年）から第126回までで、宮古島51題、石垣42題、久米島2題、伊是名2題、南大東島1題）を数えます。これらの多くの発表が今の沖縄の医療水準の礎になりました。今回も151演題と多くの発表と恒例のミニレクチャー、特別講演がございます。

ミニレクチャーは、アドベンチストメディカルセンター 家庭医療科の許智栄先生より「目指そう！プロアクティブな高齢者診療」、浦添総合病院 副院長兼看護部長 伊藤智美先生と救急集中治療部 北原佑介先生より「看護師特定行為研修について」、さらに特別講演として国立感染症研究所 感染症疫学センター第2室長の砂川富正先生より「健康危機および経済問題としての輸入感染症への対策」について講演いただきます。

いずれの演題も時代を捉えたものです。私も浦島太郎にならないように心がけ拝聴したく思います。最後に、戦前戦後の歴史の変動に大きく影響を受ける沖縄で、粛々と医学の質を担保し研鑽をつづけられる沖縄県医学会を支え継続

されてきた多くの医師会各会員ならびに関係者の方々に改めて敬意を表するとともに、本会にご参会いただける全ての方のブラッシュアップと、今後、会員各位が支えられる住民の方がたの健康寿命がＶターン回復が出来ますよう祈念致しまして、挨拶とさせていただきます。より多くの方のご聴講をお待ちしております。たんでぃがあたんでぃ。

ミニレクチャー（抄録）

(1)「目指そう！プロアクティブな高齢者診療」

アドベンチストメディカルセンター　家庭医療科
許　智栄

高齢者の診療で苦い経験をしたことがない医師などいないだろう。

腹痛もないのに胃潰瘍穿孔、発熱もないのに敗血症、はたまた、歩けるといったので帰宅させたらまた転倒・大腿骨頸部骨折、認知症だと思ったらせん妄だったなど、数え上げればきりがない。

高齢者診療は難しい。これに対する医療者の対応は大きく２通りだ。つまり、高齢患者からの逃避とピットフォール対応への工夫である。このどちらの対応も残念ながら問題を抱えている。高齢化の荒波に揉まれ、今後約20年間は多死を迎える社会では、日常診療で高齢者を避け続けることなど現実的ではない。一方、高齢者診療に潜むピットフォールに対応する工夫は大切ではあるが、高齢患者の多様性に打ち砕かれ、疲弊をもたらす危険を孕んでいる。

この難しい高齢者診療に対応するには、「病気になってから」というリアクティブ（反応的な対応）な考えから脱却し、プロアクティブ（先行的な介入）な視点を取り入れる必要がる。

高齢者日常診療でよく見る、骨折や転倒、体重減少やうつなどは氷山の一角であり、そういった現象にリアクティブに対応するだけでは、高齢者の診療は成り立たない。日々目にする現象の深淵にはフレイル、サルコペニア、認知機能低下および食思不振という根本原因ともいうべき病理（Modern Giants of Geriatrics）が潜んでいることを、老年医学の発達が明らかにしており、リアクティブ対応だけにとどまらずに、プロアクティブに原因を見つけだし、介入し、新たな現象の予防や被害の軽減に努めることが求められている。

このようにプロアクティブな高齢者診療が求められてはいるが、そこにはピットフォールが潜んでいることを我々医療従事者は認識しておくべきである。それは、プロアクティブな視点に立つことだけに目を取られ、「何にプロアクティブになるべきかを考えるのは患者である」という視点が抜け落ちてしまうことである。

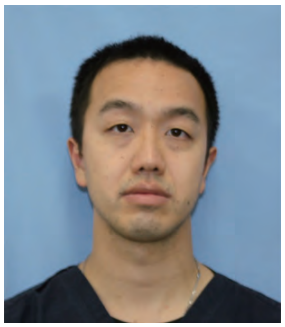
転倒を繰り返すが、自分の家での生活を求める独居高齢者。プロアクティブな診療を心がけ、フレイル・サルコペニアであることを見つけだしさらなる転倒からの重症外傷予防に見守りのある施設入居を決定。患者はしぶしぶ従うが、施設で引きこもり、表情も会話も減っていく日々。認知症・フレイルで施設入居しているが、その時が来れば家で自然に迎えたいと思う患者。誤嚥を繰り返すたびに病院に搬送され、その度に多くの検査を受けていたが、今度の入

院では「予防」のために胃瘻について医師が家族と話をする…。

今回のミニレクチャーでは、Modern Giants of Geriatrics に着目した、プロアクティブな高齢者診療のポイントを振り返るとともに、忘れられがちな「何にプロアクティブになるべきか？」言いかえるなら、「寄り添うべき高齢患者のおもいとはどのようなものなのか？」という視点も網羅した目指したいプロアクティブな高齢者診療をまとめ、明日からの診療に役立てられるようにしたい。

(2)「看護師特定行為研修について」

副院長兼看護部長　伊藤　智美
浦添総合病院　救急集中治療部　北原　佑介



【言葉の定義】

○特定行為とは？：「診療の補助であり、看護師が手順書により行う場合には、実践的な理解力、思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能が特に必要とされる 38 行為 21 区分」※例：侵襲的陽圧換気の設定の変更、気管カニューレの交換、胃ろうカテーテルの交換、褥瘡治療における壊死組織の除去、脱水症状に対する輸液による補正、など。

○特定行為研修とは？：「看護師が手順書により特定行為を行う場合に特に必要とされる実践的な理解力、思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能の向上を図るための研修であって、特定行為区分ごとに特定行為研修の基準に適合するもの」

○手順書とは？：「医師又は歯科医師が看護師に診療の補助を行わせるために、その指示として作成する文書であって、『看護師に診療の補助を行わせる患者の病状の範囲』、『診療の補助の内容』等が定められているもの」

（看護師の特定行為研修制度ポータルサイト／日本看護協会、より）

【特定行為制度が生まれた背景】

団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年に向けて、さらなる在宅医療等の推進を図っていくためには、優秀な看護師が増えるというだけでは足りないと予想されています。そこで、医師や歯科医師の判断を待たずに特定行為を行う看護師を養成し、確保していく必要があるとしてこの制度が生まれました。

この特定行為のいくつかは、すでに看護師が手順書によらずに（医師の直接指示の下に）行っているものです。本制度を導入した場合でも、患者の病状や看護師の能力に応じて、医師が直接行うか、どのような指示で看護師に行わせるかを医師が判断することは変わりません。

【特定行為研修の実際～浦添総合病院の例～】

特定行為研修は共通科目と区分別科目に分かれています。共通科目は、特定行為実践のバックグラウンドとなる実践的な理解力、思考力、判断力、知識を身につけるためのものです。「医師の思考を身につける」というコンセプトで計画され、病態生理、薬理、臨床推論、フィジカルアセスメントなどの科目があります。区分別科目は、各特定行為そのものの習得に関する科目です。

当院の研修では、全日病 SQUE 看護師特定行為研修®の e ラーニングを活用しています。科目ごとに集合研修を行い、グループ学習で思考力を高め、見識を広げます。12 月から各自の所属施設・所属部署で、特定行為の実習が始まります。

沖縄県内では 3 施設で行われています。当院では平成 30 年 4 月に開講しました。呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連と呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連の 2 区分を実施してお

り、平成 31 年度からはろう孔管理関連も含めた 3 区分の研修を提供する予定です。

現在の 1 期生は、院内から 7 名、他施設から 5 名の計 12 名で、うち 4 名は訪問看護に従事しています。

【修了生の未来】

筆者は、看護師特定行為制度の価値は、看護師が特定行為を実践することそのものではないと考えています。

当院では、本制度の研修を修了した看護師には 2 つの役割を期待しています。①チーム医療のキーパーソン、②質の高い看護の実践者・指導者、となり患者と地域に貢献することです。

＜①チーム医療のキーパーソン＞

本研修には、チーム医療、コミュニケーション、在宅医療・訪問看護の実際、に係る内容が多く含まれる。また、医師の視点で学習を積み重ねることで医師看護師連携の要にもなりうる。実際にグループワークのなかで、病院と在宅の橋渡し役になることを自己の目標として掲げた研修生も多かった。

＜②質の高い看護の実践者・指導者＞

行為のバックグラウンドとして医学を深く学びなすのだが、実際は看護実践全体の質向上に寄与すると考えています。特に、臨床推論の学習、問題解決トレーニングが大きく影響することでしょう。可能性を幅広く考える、少ない状況で可能性を除去したり決定したりせず検討を進める、問題を発見し解決しようという意欲、問題の原因を丁寧にさぐる、解決策を広い視野で探し検討する、といった能力の獲得を目指しています。

これらを学んだ修了生たちは、自身の看護ケアの向上のみならず後輩やチームのレベルアップにも貢献してくれると期待しています。

特 別 講 演（抄録）

「健康危機および経済問題としての輸入感染症への対策」

国立感染症研究所　感染症疫学センター　第 2 室長
砂川　富正

我が国では、来年 2019 年のラグビーワールドカップ、翌 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック等の国際的なスポーツイベントを複数控え、今後の経済成長の柱として、「観光」に期待する空気が充満している。国は、訪日外国人観光客を 2020 年までに 4,000 万人、2030 年には 6,000 万人との目標を定め、施策としてのインバウンドの受入強化に取り組んでいる。観光立県である沖縄県では、県内いたるところで、海外からの観光客の集団を見ない日は既に無いが、この風景は、大量の人波が押し寄せることで発生する事象を総称する「マスギャザリング（Mass Gathering：以下、MG）」のようにも目に映る。

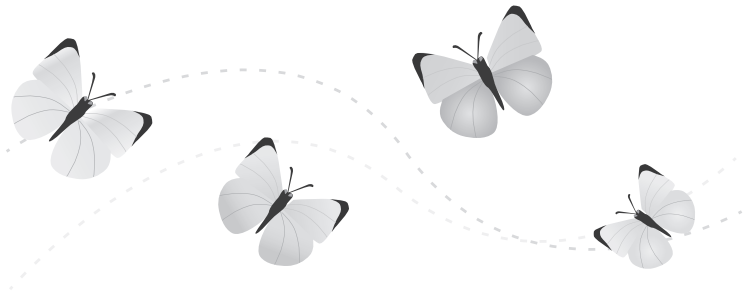
MG について、日本集団災害医学会では「一定期間 , 限定された地域において , 同一目的で集合した多人数の集団」と定義している。MG における公衆衛生上のチャレンジは、教科書的には、押し寄せる人々の物理的な管理の問題（交通渋滞を含む）、救急医療の備えに対する影響、廃棄物を含む清潔環境の維持の問題、治安の問題、そして食品衛生や感染症の問題増加が加わる。沖縄県内では既に思い当たる問題もあるのではないだろうか。インバウンドの増加を MG

と考えるならば、関連して発生する感染症の問題は、MGによる多くの事象が相互に関連することから、横断的・包括的に取り組まれる必要があることを示唆する。

多くの観光客に紛れて外部から侵入してきた感染症の顕著な例として、沖縄県ではこの春、100例にも達する麻疹の流行を経験した。外国人観光客からの二次感染者29人のうち25人（86％）を飲食店や土産店等の観光業従事者が占めたほか、その後に国内外からの旅行のキャンセルが相次ぎ、10億円に届こうかという経済損失が発生した。この事象は、観光は感染症流行の影響に極端に脆いという従来からの指摘をまさに繰り返した（例：2003年香港SARS、2009年関西地区新型インフルエンザ等）。オリンピック等の開催が迫る中での関東を中心とする風疹の流行は震撼すべき事態である。観光立県である沖縄県においてはさらに、経済問題としての感染症への対策は必須である。

経済問題とは言ったが、インバウンド増加に伴う感染症における最大の問題は、やはり新興感染症を含めた健康危機管理の問題である。元々島嶼環境では、従来より住民の免疫状態が均一で低レベルであることが多く、ワクチン接種が徹底されていない、あるいはワクチンがない感染症であれば、その侵入により多くの被害が発生しやすい。沖縄においても、過去に麻疹、風疹、梅毒等の災禍を経験してきた。インバウンドを多く受け入れるということは、新興感染症を含めたリスクをも受け入れることである。演者の国内外における新興感染症等対応の経験からは、特に臨床現場において必要なのは、平時からの感染制御の強化であり（ワクチンを含む）、情報の重要性であった。さらに、公衆衛生部局において、接触者調査を的確に行う体制であったり、特に最近は、感染症発生時（時には発生前から）のリスク評価の実施が重要となっていることを強調したい。これは、事象それぞれの特徴（重症度や感染性）や治療・対策の状況等を判断して、定期的にリスク評価を行い、その都度の対応に結び付けていく最近の国際的な動向である。既に国内の新型インフルエンザ対応においても、そのような評価をベースとした対応が含まれている。そのような公衆衛生部局の対応を医療側も理解し、支えていくことが重要である。

インバウンド増加に伴う感染症増加への対応は、健康及び経済の両方の問題に対する挑戦であり、危機管理である。本講演においては、それらの基本的な考え方をベースに、現在どのような感染症がMG対策としても具体的に重要視されているか、また、国内外において話題となっているかなどについても解説したい。



一般講演 演題・演者一覧

＜口演部門＞

1. 運動誘発性咽頭閉塞症の一例　－走ると喉が閉まる－
沖縄県立中部病院　呼吸器内科　**山城　信**
2. 沖縄型神経原性筋萎縮症の自然史 - 約 90 例の検討と一般医に留意してほしいこと
国立病院機構沖縄病院　脳・神経・筋疾患研究センター
諏訪園　秀吾
3. 食物経口負荷試験 2200 例の検討
沖縄協同病院　小児科　**尾辻　健太**
4. 子宮頸癌検診における HPV 併用検診の効率的運用
豊見城中央病院　産婦人科　**前濱　俊之**
5. 当院における急性期熱傷症例の検討
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
高江洲　怜
6. 当院における成人院外心停止症例への ECPR の効果
沖縄県立南部医療センター　**宮里　篤之**
7. 那覇市立病院における院外心停止患者の現状
那覇市立病院　内科　**知花　なおみ**
8. ESD を行った食道癌 72 例の治療成績の検討
ハートライフ病院　外科　**奥島　憲彦**

＜ポスター部門＞

沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）

9. 取り下げ
10. 外傷を契機に発症した化膿性筋炎の一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
小児総合内科　**鎌田　さつき**
11. ウレアーゼ産生菌による尿路感染症と神経因性膀胱による排尿障害により、高アンモニア血症・意識障害をきたした高齢女性の一例
沖縄協同病院　**中村　一希**
12. 診断に問診と理学所見が重要であった急性夏型過敏性肺炎の一例
中頭病院　呼吸器内科　**與那覇　梨早**
13. 繰り返す紫斑を契機に診断された後天性血友病 A
琉球大学医学部附属病院臨床研修センター　**藤澤　由佳**
14. 切除不能進行胃癌に対して集学的治療を施行した一例
ハートライフ病院　外科　**石嶺　伝羽**
15. 胆管空腸吻合部静脈瘤に対して経皮経肝的バルーン閉塞化逆行性経静脈的塞栓術（PTO+B-RTO）を用いて止血を行った一例
沖縄赤十字病院　放射線科　**吉野　裕太郎**
16. ラモトリギンによる薬疹の一例
浦添総合病院　総合内科　**野波　啓樹**
17. 薬物中毒検出用キットを用いて診断し、適切な対応を行うことで救命し得た三環系抗うつ薬中毒の 1 例
沖縄県立北部病院　初期研修医 2 年次　**照屋　翔二郎**
18. DKA に至らずに劇症 1 型糖尿病と早期に診断可能であった一例
浦添総合病院　**友竹　鴻介**
19. 低体温症を来した未治療甲状腺機能低下症による粘液水腫性昏睡の一例
南部徳洲会病院　救急診療科　**山元　朝仁**
20. ギランバレー症候群に中枢神経系脱随を合併した 1 例
中部徳洲会病院　**渡慶次　裕也**
21. 典型的な経過をたどった自己免疫性膵炎の一例
沖縄県立中部病院　消化器内科　**吉見　未祐**
22. 当院で経験した急速進行性糸球体腎炎を呈した抗糸球体基底膜腎炎の一例
豊見城中央病院　初期研修医　**川畑　大樹**

呼吸器内科

23. レジオネラ肺炎治療後に胸部 X 線で異常陰影が増悪した一例
沖縄県立北部病院　内科　**小笠原　嵩天**
24. Actinomyces meyeri による膿胸の一例
中頭病院　呼吸器内科　**山元　隆太**
25. 側臥位胸部単純 X 線検査が診断に有効であった気胸の 2 症例
浦添総合病院呼吸気センター　内科　**愛知　高明**
26. ブシラミン内服中に黄色爪症候群をきたした 1 例
大浜第一病院　**中村　英資**
27. 多発肺定位への定位放射線治療後に在宅酸素療法導入が必要な肺臓炎をきたした一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
放射線科　**前本　均**
28. PS 不良例に対し 1 次治療でペムブロリズマブ投与を行い、治療効果を認めた一例
国立病院機構沖縄病院肺がんセンター　呼吸器内科
知花　賢治

呼吸器外科

29. 右大葉性肺炎と左主気管支の肺癌気管支転移により急性呼吸不全をきたした 1 例
浦添総合病院　**稲生　真夕**
30. 胸腔鏡手術を施行した肺動静脈瘻の 6 例
中頭病院　呼吸器外科　**嘉数　修**
31. 右外傷性血気胸に対して胸腔ドレナージ後に発症した再膨張性肺水腫の 1 例
中頭病院　呼吸器外科　**大池　聖志**
32. 気管支鏡検査により虫体を確認し得た肺犬糸状虫症の 1 例
国立病院機構沖縄病院　肺がんセンター　外科
平良　尚広
33. 静脈浸潤による SVC 症候群と重症筋無力症を合併した手術不能浸潤性胸腺腫の一例
南部徳洲会病院　**應武　ゆうやスティーブン**
34. CPR 後急速に増大した左後胸壁胸膜外血腫に対する 1 手術例
中頭病院　呼吸器外科　**山城　志織**
35. Paraneoplastic syndrome として膜性腎症を合併した肺癌の 1 例
中頭病院　呼吸器外科　**深見　朋世**

沖縄県医学会賞：（研修医部門）
左から、優秀賞：吉見先生、鎌田先生、最優秀賞：照屋先生

36. 高周波スネアで切除した小児気管腫瘍の１例
中頭病院　呼吸器外科　**大田　守雄**
37. 化学放射線療法後に Dartevelle（前方）+Paulson（後方）アプローチで切除した右肺尖部肺癌の１例
浦添総合病院　呼吸器センター　**梶浦　耕一郎**
38. 慢性腎不全患者に発症した縦隔内異所性副甲状腺腺腫による原発性副甲状腺機能亢進症の１手術例
琉球大学大学院　胸部心臓血管外科学講座
古堅　智則

循環器外科

39. 右側大動脈弓、左鎖骨下動脈起始異常を伴う B 型解離亜急性期に TEVAR を施行した１例
沖縄協同病院　心臓血管外科　**東　理人**
40. 外傷性大動脈解離に対する TEVAR 時の工夫
琉球大学大学院　医学研究科　胸部心臓血管外科学講座
比嘉　章太郎
41. 右鎖骨下動脈分岐異常を伴う弓部大動脈瘤に対する一手術症例
豊見城中央病院　心臓血管外科　**伊波　孝路**
42. 開心術後遠隔期胸骨に接する上行大動脈瘤に対し上行部分弓部置換術を施行した一例
琉球大学大学院　胸部心臓血管外科学講座
安藤　美月
43. 膝窩動脈血栓内膜摘除術の一例
豊見城中央病院　心臓血管外科　**島袋　伸洋**
44. 肺塞栓を伴った巨大右室内腫瘤に対して外科的摘出術を施行した一例
沖縄県立中部病院　一般外科　**奥井　健太**
45. 肝細胞癌による右房内腫瘍塞栓に対し、体外循環下に手術を行った１例
南部徳洲会病院　心臓血管外科　**喜納　大貴**
46. 外科的瘤処理・血行再建術を施行した孤立性特発性腹腔動脈解離・解離性動脈瘤の１例
浦添総合病院　心臓血管外科　**盛島　裕次**
47. 感染性心内膜炎による狭小弁輪を伴う大動脈弁閉鎖不全症に対して、自己心膜を用いた弁再建術を施行した１例
琉球大学大学院　胸部心臓血管外科学　**前田　達也**
48. 頸動脈狭窄を合併した大動脈狭窄症（連合弁膜症）の透析患者に対する治療戦略
豊見城中央病院　心臓血管外科　**田淵　正樹**
49. 感染性心内膜炎治療後に発症した重症僧帽弁閉鎖不全症に対する僧帽弁形成術の一例
豊見城中央病院　**楢山　耕平**
50. 大動脈弁形成術への新たな取り組みとその早期成績
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
宗像　宏

内分泌・代謝

51. 双胎妊娠に伴った妊娠性一過性甲状腺機能亢進症の一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
総合内科　**仲本　朋香**
52. グリチルリチン投与による偽性アルドステロン症から脱力と高血圧切迫症を来した一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
幸喜　未那子
53. 高齢者の頸部痛で診断に苦慮した１例
大浜第一病院　**盛島　明丈**
54. 糖尿病性ケトアシドーシス / 高血糖高浸透圧症候群を契機に発症した成人の可逆性脳梁膨大部病変を有する軽症脳炎 / 脳症の一例
中部徳洲会病院　**青木　壮則**
55. 重症低ナトリウム血症を伴った痙攣重積発作で搬送され，入院後多彩な要因が判明した一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
総合内科　**立花　早人**

循環器内科

56. 発作性上室性頻拍が疑われた持続性心室頻拍の一例
浦添総合病院　循環器センター　**溝渕　海**
57. 心房細動に対するアブレーションによる洞調律維持は認知機能を改善する
那覇市立病院　循環器内科　**間仁田　守**
58. 発作性心房細動を合併した拡張型心筋症による難治性心不全に対して心臓再同期療法とカテーテルアブレーションが有効であった一例
豊見城中央病院　循環器内科　**前田　峰孝**
59. 若年潰瘍性大腸炎患者の心機能低下で鑑別を要した一例
浦添総合病院　循環器内科　**松澤　暁子**
60. PCI 後の冠動脈再狭窄に対する低侵襲冠動脈バイパス術（MICS CABG）の有用性
豊見城中央病院　心臓血管外科　**山内　昭彦**
61. VIABAHN 急性閉塞の一例
豊見城中央病院　循環器内科　**日高　幸宏**
62. 膝窩静脈瘤による深部静脈血栓症 / 肺血栓塞栓症２症例の検討
豊見城中央病院　循環器内科　**新垣　朋弘**
63. 統合失調症患者における悪性症候群を契機にたこつぼ心筋症を発症した一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
総合内科　**林　沙耶花**

感染症

64. 咽後膿瘍、石灰沈着性頸長筋腱炎との鑑別を要した MSSA 菌血症の一例
中部徳洲会病院　**能美　康彦**
65. 腹痛を主訴とした急性巣状細菌性腎炎の一例
沖縄赤十字病院　**宮城　加奈**
66. 血液培養が診断と治療に役立った２例
那覇市立病院　内科　**上地　修裕**
67. 高齢透析患者の化膿性肋骨骨髄炎に対して保存的加療を行った１例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
総合内科　**山城　俊樹**
68. Bacteroides fragilis 菌血症を契機に早期大腸癌を根治できた一例
沖縄県立北部病院　内科　**仲村　和歌子**

血液

69. 初診時に急性胆管炎が疑われた TAFRO 症候群の一例
沖縄県立中部病院　総合内科　**三輪　俊貴**
70. 原因不明の両側胸水と全身浮腫を主訴に来られた方の IgG4 関連疾患、Castleman 症候群、悪性リンパ腫との鑑別に苦慮した TAFRO 症候群の一例
中部徳洲会病院　**萩原　啓太**
71. Primary effusion lymphoma（PEL）−like lymphoma の一例
ハートライフ病院　**宮城　敬**

消化器内科

72. 琉生病院における好酸球性食道炎の臨床的検討
琉生病院　**金城　渚**
73. トリアムシノロン局所注入にて食道狭窄を回避しえた、アルカリ誤嚥後高度食道粘膜障害の一例
中部徳洲会病院　**中村　慎哉**

74. より安全な PTEG 造設術確立に向けて～内視鏡補助下及び Hydro - release 併用 PTEG 造設術の検討～
同仁病院　**山城　惟欣**
75. 胃粘膜所見より悪性貧血の診断に至った一例
豊見城中央病院　初期研修医　**金城　由佳里**

救急

76. ドクターカーに搭載した病院前 12 誘導伝送システムの効果と課題について
中部徳洲会病院　救急総合診療部　**友利　隆一郎**
77. 旅行中に起こった 68 分間の心停止を乗り越え社会復帰を遂げた一例
浦添総合病院　**片岡　小百合**
78. 飲酒後、車中泊を行い、ショックバイタルで救急搬送された 1 例
沖縄県立北部病院　内科　**原　直寛**
79. 炎症所見のみを主症状として来院した急性大動脈解離の一例
大浜第一病院心臓血管センター　循環器内科
具志堅　弘樹
80. 入院後心停止に至った非骨傷性脊髄損傷の一例
中頭病院　**伊禮　奏子**

産科

81. 虫垂炎合併妊娠の一例
ハートライフ病院　産婦人科　**宮崎　優樹**
82. 腹腔鏡下子宮筋腫核出術後妊娠 24 週に子宮破裂をきたした 1 例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
産婦人科　**新垣　杏奈**
83. 当院における RA、SLE 合併妊娠症例の臨床的検討
豊見城中央病院　産婦人科　**藤野　翔太郎**

婦人科

84. Intrauterine device（IUD）に合併した骨盤内放線菌症の 1 例
沖縄県立北部病院　**我謝　正平**
85. 卵巣腫瘍と鑑別困難であった骨盤内神経鞘腫の 1 例
豊見城中央病院　産婦人科　**大城　大介**
86. 子宮卵巣摘出後の家庭内のストレスに対し、HRT と漢方薬にて効果を示した 1 例
豊見城中央病院附属健康管理センター　**山城　貴恵**
87. 若年者に発症した巨大混合型卵巣胚細胞性腫瘍の 1 例
豊見城中央病院　**小林　剛大**

研修・教育

88. 豚軟骨ソーキを使った胸腔ドレーン挿入のシミュレーションとその有効性
沖縄県立北部病院　**丸岡　悠**
89. 救急症例の 2 例から考える複視をきたす疾患の鑑別疾患
沖縄県立北部病院　**神人　将**
90. 異物による小児の口腔咽頭外傷をいかに予防するか ー当院の診療経験からー
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
沼澤　雅哉
91. 当院における医原性気胸のリスク因子の検討
沖縄県立中部病院　総合診療科　**仮屋　この実**

麻酔科

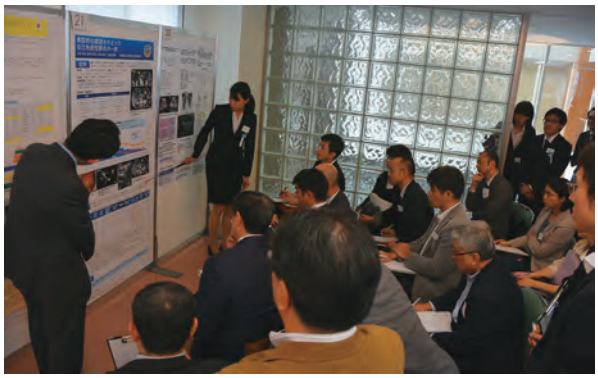
92. 術中肺リクルートメントにて低酸素血症と発作性心房細動が改善した一例
沖縄赤十字病院　麻酔科　**古石　直輝**
93. 超肥満患者の緊急気管挿管をきたした 1 例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
根本　蒼
94. 脳室開窓術後の急激な脳圧低下による神経学的異常によって再挿管となった一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
仲本　昌文
95. 産後大量出血に対し集学的治療を行い救命することができた一症例
中頭病院　麻酔科　**宮里　太朗**

腎・泌尿器

96. 去勢抵抗性前立腺癌（CRPC）に対する内照射療法中に歩行障害をきたした一例
琉球大学医学部附属病院放射線科　**石川　和樹**
97. 当院における経尿道的尿路結石破砕術の検討
中部徳洲会病院　泌尿器科　**田中　慧**
98. 当院におけるエコーガイド下 PTA
牧港中央病院　**毛利　教生**
99. 透析穿刺部の近傍に生じた壊死性軟部組織感染症の 1 例
沖縄県立北部病院　**新垣　貴之**
100. 超高齢者（100 歳老人）の血液透析療法
医）十全会　おおうらクリニック　**大浦　孝**
101. 90 歳女性（要介護 3）の非透析慢性腎臓病貧血にエリスロポエチン・ベータ・ペゴル（ミルセラ）（1 年間）と B12（半年間）の投与により Hb 値、Cr 値および NT PRO BNP 値と生活活動性の改善が認められた 1 例
南城つはこクリニック　**小山　信二**
102. 糖尿病性腎症患者における SGLT2 阻害薬による尿タンパク減少効果について
首里城下町クリニック第一　**田名　毅**

一般外科

103. 肋骨固定用プレートにより抜管可能となった Flail Chest 1 例
沖縄県立中部病院　外科　**神田　修平**
104. 肛門括約筋形成手術の 1 例
ハートライフ病院　外科　**阿嘉　裕之**
105. 超高齢者における一次性大動脈十二指腸瘻に対する集学的根治術の 1 例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
研修医　**石川　巧朗**
106. 弓状靭帯による腹腔動脈起始部狭窄を伴う十二指腸乳頭部癌に対し、血行再建を行い PD を施行した一例
沖縄県立中部病院　一般外科　**川﨑　恭兵**
107. Maggot 治療が奏功した重症下肢虚血による難治性踵部皮膚潰瘍の 1 例
ハートライフ病院　**東盛　貴光**
108. 完全閉鎖式結紮切除術による痔核根治術の工夫
大浜第一病院　大腸・肛門外科　**仕垣　幸太郎**
109. 原発巣不明の悪性黒色腫腋窩リンパ節転移の一例
沖縄県立中部病院　外科　**新井　智仁**
110. 腸重積きたした高齢者大腸癌の 2 例
南部徳洲会病院　**應武　絢子**



111. 両側鼠径部子宮内膜症の１例
沖縄県立中部病院　外科　**岡田　奈月**
112. 乳癌進行症例に対する CART
那覇西クリニック　**上原　協**
113. 老健施設における悪性腫瘍の「看取り」～受け入れ可能な条件についての検討
介護老人保健施設　あけみおの里　**石川　清司**
114. 巨大濾胞性甲状腺癌に胸骨正中切開によるアプローチを適用した一例
沖縄県立中部病院　外科　**神谷　俊輔**
115. 甲状腺篩型乳頭癌の１例
中頭病院　病理診断科　**仲田　典広**

肝胆膵・大腸

116. 乳糜腹水に対してオクトレオチドが有効であった1症例
ハートライフ病院　消化器内科　**柴田　大介**
117. 虫垂転移をきたした肝細胞癌の１例
ハートライフ病院　外科　**西原　実**
118. HIV 抗体陽性の A 型急性肝不全の１例
浦添総合病院　消化器内科　**岩井　俊賢**
119. 全大腸内視鏡検査挿入困難例に対する大腸 CT の検討
ハートライフ病院　放射線科　**高良　誠**
120. Golimumab が著効し、寛解導入に至った潰瘍性大腸炎の一例
同仁病院　消化器内科　**柏木　宏幸**

整形外科・リハビリ

121. 硬膜外くも膜嚢腫を併発した馬尾ヘルニアの一手術例
大浜第一病院　**山川　慶**
122. 大腿骨転子部骨折に対し sliding hip screw を用いて骨接合術を行った症例の検討
大浜第一病院　整形外科　**仲間　靖**
123. 転移性腫瘍と鑑別を要した結核性脊椎炎の一例
南部徳洲会病院　**金城　留嘉**
124. 頚椎前方固定術後に血腫麻痺を来たし再手術に至った１例
南部徳洲会病院　整形外科　**村上　太孝**
125. 当院回復期リハビリテーション病棟入院患者の歩行速度
南部徳洲会病院　**滝吉　優子**

小児科

126. 持続血液濾過透析を導入した溶連菌感染後糸球体腎炎の１例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
栗原　茉杏
127. A 群溶連菌によるオトガイ下膿瘍と川崎病を併発した一例
南部徳洲会病院　小児科　**松川　格**
128. RS ウイルス感染症とヒトメタニューモウイルス感染症に対する Modified Pulmonary Index Score の有用性の検討
中部徳洲会病院　**久手堅　憲太**
129. HFNC（high flow nasal cannula）の細気管支炎における導入基準
南部徳洲会病院　小児科　**朝倉　秋乃**
130. 抗てんかん薬による薬剤誘発性ループスの小児症例
沖縄県立北部病院　小児科　**中馬　卓也**
131. サイトカインプロファイルにより全身型若年性特発性関節炎（sJIA）を背景としたマクロファージ活性化症候群（MAS）の診断をし得た 14 歳女児例
沖縄県立北部病院　小児科　**中村　祐太**
132. 信仰上の理由で治療に難渋した偽性副甲状腺機能低下症 1a 型の 14 歳例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
小児総合診療科　**住居　慎一郎**
133. 正常新生児 84 名の臍帯血ケトン体値について
南部徳洲会病院　小児科　**今西　康次**
134. IgA 血管炎に合併した小腸重積症の１例
中頭病院　**知花　愛里**
135. 乳児未熟後腹膜奇形種の一例
沖縄県立中部病院　小児科　**小森　宏樹**

消化器外科

136. 肥満関連腎症に起因した慢性腎不全による血液透析患者にスリーブ状胃切除後に適切な減量が得られ腎移植に成功した１例
大浜第一病院　**水本　小百合**
137. 診断に 10 年を要した胸痛を主訴とした食道アカラシアの１例
ハートライフ病院　**兼元　萌実**
138. 穿孔性腹膜炎を契機に発見された肺癌小腸転移の一例
沖縄県立中部病院　**堀江　博司**
139. 診断に苦慮した直腸癌肛門管浸潤の一例
中頭病院　**幸喜　絢子**
140. 当院における食道がん手術症例の検討
沖縄赤十字病院　外科　**仲里　秀次**
141. 急性虫垂炎に対する虫垂切除後に虫垂腫瘍が指摘された症例の検討
沖縄県立中部病院　外科　**松村　彰太**
142. 魚骨による消化管穿孔２症例の検討
中部徳洲会病院　外科　**櫻井　佑**
143. 止血照射が奏功した進行噴門部癌の１例
沖縄県立中部病院　放射線科　**戸板　孝文**
144. Amyand's hernia の１例
沖縄赤十字病院　外科　**名城　政俊**
145. 放射線治療が有効であった、大腸癌上顎転移の１症例
浦添総合病院　診療部　**矢田　真宏**
146. 二期的に手術を行い安全性を得た狭窄型虚血性腸炎の一例
中部徳洲会病院　外科　**皆川　駿**

神経内科

147. 単独の左外転神経麻痺を呈し診断に苦慮した中脳被蓋部梗塞の一例
沖縄県立宮古病院　**寺司　佳代**
148. 免疫吸着療法が有効であった抗アクアポリン抗体４陽性視神経脊髄炎の１例
中頭病院　総合内科　**平良　貴大**
149. 持続する悪心・嘔吐が誘因となり発症した非アルコール性 Wernicke 脳症の１例
中頭病院　総合内科　**喜屋武　慶丸**
150. Lambert-Eaton 筋無力症候群の一例
国立病院機構　沖縄病院　神経内科　**赤嶺　博行**
151. 傾眠を主訴に来院し、翌朝両側視床梗塞と診断した１例
沖縄県立北部病院　内科　**松下　正紀**

第１２７回沖縄県医師会医学会総会の演題募集について（ご案内）

本会では、標記医学会総会を下記のとおり開催することになりました。
つきましては、本会ホームページ上にて一般演題を募集いたしますので、《ユーザー名・パスワード》をご参照の上、お申し込みください。

記

※『一般演題募集期間』：平成 31 年 2 月 13 日（水） 9：00～
3 月 14 日（木）18：00 迄
『一般演題修正期間』：平成 31 年 3 月 19 日（火）18：00 迄

沖縄県医師会ホームページ（http://www.okinawa.med.or.jp）
『沖縄県医師会医学会総会一般演題募集』よりログイン

ユーザー名：okiigaku　　パスワード：127igaku

会　期：2019 年 6 月 9 日（日）
場　所：沖縄県医師会館
内　容：
〇特別講演
「熊本地震における病院避難と今後の対策（仮）」
鹿児島市立病院 救命救急センター長　吉原 秀明先生
（救急科専門医更新のための【救急科領域講習】③救急領域に関する医師会主催のセミナー・講演会・講習会／1 単位付与）

〇ミニレクチャー
〇一般講演

※演題の採否、演題分類等についてはプログラム編成委員会にご一任ください。
※当日は託児所を設置致します。ご利用を希望される方は本会 HP をご確認ください。（完全予約制）
※第 125 回県医学会より、一般演題募集のお知らせは、県医師会報と本会ホームページのみでのお知らせとなっておりますのでご了承のほどお願い申し上げます。

問合先：沖縄県医師会業務１課　與儀(TEL：098-888-0087)

平成31年沖縄県医師会 新年祝賀会・医事功労者表彰式

常任理事　稲田　隆司

沖縄県医師会新年祝賀会・医事功労者表彰式
式　次　第

日時：平成31年1月5日（土）19：00～
場所：ANA クラウンプラザホテル
沖縄ハーバービュー（彩海の間）
司会：渡辺克江アナウンサー

1 開会のことば　宮里善次副会長

2 会長挨拶　安里哲好会長

3 第33回沖縄県医師会医事功労者表彰
・県知事表彰
・県医師会長表彰
・被表彰者代表挨拶

4 来賓祝辞　玉城デニー沖縄県知事

5 鏡開き・乾杯　藤田次郎琉球大学医学部附属病院長

6 祝宴・余興

7 福引き

8 閉会のことば　稲田隆司常任理事

去る1月5日（土）ANA クラウンプラザホテル沖縄ハーバービューにおいて、平成31年沖縄県医師会新年祝賀会・医事功労者表彰式が開催され、会員並びにご家族、来賓併せ210名余りの多数の方々にご参加いただき、大いに賑わった。

医事功労者表彰式では、県知事表彰3名、県医師会長表彰67名の先生方が受賞された。

始めに琴演奏で来場者のお出迎えを行ない、宮里善次副会長の開会の辞が述べられ、その後安里哲好会長が挨拶に立たれ、次のとおり述べられた。

安里哲好沖縄県医師会長挨拶

あけましておめでとうございます。

本日は、平成31年の新春を寿ぐ沖縄県医師会新年祝賀会並びに医事功労者表彰式を開催いたし

ましたところ、玉城知事をはじめ多数のご来賓の方々、会員並びにご家族の皆様方にご参加いただきまして衷心より感謝申し上げます。

さて、昨年を振り返ってみますと、西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震、台風被害等、これまで大規模災害に遭遇しなかった地域を含め、全国どこの地域でも被災地になり得る時代であることを痛感いたしました。被災地におかれましては一日も早い復旧復興を祈念申し上げたいと思います。

一方、明るいニュースもありました。昨年、ノーベル医学・生理学賞を受賞されました日本医師会会員で、京都大学高等研究院副院長・特別教授の本庶佑先生は、がん免疫治療を確立されました。日本人による医学・生理学賞の受賞は2年ぶりの5人目の快挙となり、国民にとっても医療界にとっても素晴らしい研究成果であります。

さて、かつては長寿県を誇っておりました我が県ですが、今や平均寿命の発表毎に順位を下げている状況にあります。特に65歳未満の健康状態や死亡率が厳しい現状を分析し、昨年、沖縄県医師会では、「65歳未満健康・死亡率改善プロジェクト－働き盛り世代の健康づくり－」の事業計画を発刊いたしました。この事業は十数年先の健康づくりのみではなく、明日、来月、来年にでも発生する疾患の重症化予防と早世阻止に重点を置いた事業であります。本計画に基づき実践的かつ効果的な各種施策に取り組むと共に、県民意識改革の一環として、高血圧関連疾患を中心とした内容で、今年3月には県保健医療部のヘルスアクション事業との共催で「うりずんフェスタ」を県医師会館で開催いたします。関係各位におかれましては、ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、この後引き続き行われます第33回沖縄県医師会医事功労者表彰式では、県知事表彰に3名、県医師会長表彰に67名の先生方が表彰されます。特に、慶祝表彰におかれましては、白寿の先生が2名、米寿の先生が6名、喜寿の先生が27名おられることは誠におめでたい限りであり、沖縄県医師会の誇りであります。受賞者の皆様におかれましては衷心よりお慶び申し上げます。

最後になりますが、今年は十二支をひと巡りして、結びとなる亥年となります。同時に平成の結びの年ともなり、5月からは新たな年号に変わります。新たな時代への幕開けにふさわしく、ご参会の皆様にとって明るく希望に満ちた一年になるよう心から祈念いたしまして、私の年頭の挨拶と致します。

第33回沖縄県医師会医事功労者表彰

引き続き、医事功労者表彰に移り、玉城知事から沖縄県知事表彰（3名）の授与、安里会長から県医師会長表彰の授与が行われた。県医師会表彰については、受賞者が67名と多数おられることから、ご出席いただいた先生方のお名前をご紹介させていただき、慶祝表彰を代表して田崎邦男先生、医事功労表彰を代表して依光たみ枝先生に授与された。その後、受賞者を代表して県知事表彰を授与された玉城信光先生から挨拶があった。

玉城信光先生受賞者代表挨拶

本日は県知事表彰並びに医師会長表彰を行っていただきありがとうございます。安里会長をはじめ多くの医師会の会員の先生方に助けられ、今日まで仕事を続けられたことが今日の表彰に繋がったと思います。厚く御礼申し上げます。

また、最近は医師の働き方改革が議論されておりますが、私の時代はそれとは遥かにかけ離れており、朝早く家を出て子どもたちが寝静まった頃に帰るという私でありました。その中でも家庭を守り、立派に子どもたちを育ててくれた妻にも感謝したいと思います。昭和54年11月に東京から沖縄に戻り、県立那覇病院に17年間勤務させてもらい、多くの診察をさせて

いただき本当にありがとうございました。県立病院にマンモグラフィがない時代に、乳がんの集団検診を婦人連合会とともに開始しました。現在は各地区に検診センターができ、多くの皆様のご協力で全県下でマンモグラフィ検診が実施できるようになっております。

私は乳がんの早期発見早期治療に努めてきました。そのおかげもあり、学会で評価をいただき、平成23年に日本乳がん検診学会総会をコンベンションセンターで開催することもできました。大変ありがとうございました。

しかしながら沖縄県の乳がん発生率は全国ワースト2であります。まだまだ休んでいる暇はないようです。

開業して22年になりますが那覇市医師会、県医師会で役員をさせていただきました。県医師会では副会長として12年余りにわたり皆様とともに沖縄県の医療福祉の向上のために活動をさせていただきました。地域医療構想や地域包括ケアシステムは、まだ道半ばだと思います。これからも沖縄県と医師会がともに県民のために仕事をしていただきたいと思います。

また、沖縄県の政策参与として7年間医療行政に身を置くことができました。沖縄の医療福

平成30年度沖縄県医事功労者知事表彰

NO	会員名	受章理由	地区	推薦地区
1	玉城　信光	県医師会理事8年以上	那　覇	県医師会推薦
2	知念　清治	公的機関の病院長、副院長8年以上	公務員	地区医師会推薦
3	青木　一雄	医学・医術の向上発展に尽力	琉　大	地区医師会推薦

平成30年度沖縄県医事功労者医師会長表彰受章

NO	会員名	受章理由	地区	推薦地区
1	田崎　邦男	白寿（数え年99歳）	南　部	県医師会推薦
2	謝敷　宗吉	白寿（数え年99歳）	南　部	県医師会推薦
3	金城　幸善	米寿（数え年88歳）	南　部	県医師会推薦
4	宮城　親廣	米寿（数え年88歳）	那　覇	県医師会推薦
5	浜田　正一	米寿（数え年88歳）	中　部	県医師会推薦
6	神里　哲夫	米寿（数え年88歳）	北　部	県医師会推薦
7	伊波　恒雄	米寿（数え年88歳）	公務員	県医師会推薦
8	野原　雄介	米寿（数え年88歳）	市　立	県医師会推薦
9	大田　征夫	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
10	徳山　清公	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
11	豊永　一隆	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
12	屋良　勲	喜寿（数え年77歳）	中　部	県医師会推薦
13	赤嶺　達生	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
14	喜舎場朝和	喜寿（数え年77歳）	公務員	県医師会推薦
15	岩政　輝男	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
16	川平　稔	喜寿（数え年77歳）	中　部	県医師会推薦
17	大城　隆	喜寿（数え年77歳）	北　部	県医師会推薦
18	上地　国生	喜寿（数え年77歳）	八重山	県医師会推薦
19	宜野座治男	喜寿（数え年77歳）	中　部	県医師会推薦
20	西平　竹夫	喜寿（数え年77歳）	公務員	県医師会推薦
21	平安山英義	喜寿（数え年77歳）	中　部	県医師会推薦
22	髙石　利博	喜寿（数え年77歳）	北　部	県医師会推薦
23	比嘉　弘文	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
24	内原　栄輝	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
25	知念　正夫	喜寿（数え年77歳）	市　立	県医師会推薦
26	髙良　宏明	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
27	安座間　隆	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
28	安次嶺　馨	喜寿（数え年77歳）	公務員	県医師会推薦
29	福嶺　紀秀	喜寿（数え年77歳）	中　部	県医師会推薦
30	平良　健康	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
31	眞境名豊次	喜寿（数え年77歳）	南　部	県医師会推薦
32	比嘉　政昭	喜寿（数え年77歳）	南　部	県医師会推薦
33	上原安一郎	喜寿（数え年77歳）	南　部	県医師会推薦
34	久保　隆平	喜寿（数え年77歳）	浦　添	県医師会推薦
35	真栄城弘史	喜寿（数え年77歳）	那　覇	県医師会推薦
36	佐久本嗣夫	県医師会役員6年以上	中　部	県医師会推薦
37	具志堅政道	地区医師会役員8年以上	浦　添	地区医師会推薦
38	宮城　博子	地区医師会役員8年以上	宮　古	地区医師会推薦
39	喜納美津男	地区医師会役員8年以上	那　覇	地区医師会推薦
40	宮城　政剛	地区医師会役員8年以上	那　覇	地区医師会推薦
41	譜久原朝和	沖縄県医師会病院部会役員10年以上	南　部	県医師会推薦
42	伊志嶺恒彦	医事紛争処理委員会委員10年以上	中　部	県医師会推薦
43	依光たみ枝	沖縄県医師会女性医師部会役員10年以上	公務員	県医師会推薦
44	小禄　尚	定款等諸規定検討委員会委員10年以上	北　部	県医師会推薦
45	喜屋武幸男	高齢者対策委員会委員10年以上	市　立	県医師会推薦
46	藤田　次郎	感染症・予防接種委員会委員10年以上	琉　大	県医師会推薦
47	稲村　達哉	医療安全対策委員会委員10年以上 情報システム委員会委員10年以上	宮　古	県医師会推薦
48	松本　美幸	臨床検査精度管理委員会委員10年以上	北　部	県医師会推薦
49	仁井田りち	沖縄県医師会女性医師部会役員10年以上	南　部	県医師会推薦
50	樋口　大介	健康おきなわ21推進委員会委員10年以上	国　療	県医師会推薦
51	涌波　淳子	沖縄県医師会女性医師部会役員10年以上	中　部	県医師会推薦
52	安里　義徳	高齢者対策委員会委員10年以上	北　部	県医師会推薦
53	富名腰　進	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
54	親川　富憲	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
55	普久原　勉	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
56	上原　正照	学校医歴15年以上	那　覇	地区医師会推薦
57	上原　剛	学校医歴15年以上	那　覇	地区医師会推薦
58	比嘉　禎	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
59	宇座　達也	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
60	知念　徹	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
61	竹田　真一	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
62	花城　可雅	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
63	梁　哲成	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
64	大嶺　雅亮	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
65	涌波　満	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
66	諸見里　浩	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦
67	長嶺　安司	学校医歴15年以上	中　部	地区医師会推薦

祉の未来をどのように形成していくのか、沖縄の医療を日本の最先端にもっていくためには何が必要か考えてきました。様々な提言をさせていただき、お陰様で琉球大学にシミュレーションセンターができました。医学教育の中心ができたことになります。現在シミュレーションセンターでは中学生や高校生が体験学習として医療の場に触れることができるようになっています。医療の分野でも全国的に活躍する先生方が増えてきました。これからはノーベル医学生理学賞を受賞された本庶先生のように、沖縄から世界で活躍できる人を育て、沖縄が医療や福祉で世界一だと言われるようになってほしいと希望しております。

私は来週71歳になりますが、沖縄県に対するこれからのご奉公は元気で介護の世話にならない、若い人に迷惑をかけない後期高齢者になろうと思っています。本日は私たちのために、玉城知事をはじめ、多くの方々に祝福され大変ありがとうございました。今日の表彰を糧に元気で沖縄県のためにできることをさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。本日はありがとうございました。

玉城デニー県知事

はいさい。ぐすーよー。いい正月でーびる。

明けましておめでとうございます。

実は私は十干十二支が回り、還暦を迎え、今年は新たな健康のスタートを始めさせていただきたいと思います。昨年受けた健康診断でもオールAで、全く異常ありませんでした。心身ともに県民の為に頑張っていきたいと思います。

本日、お集まりの皆様には輝かしい新年をお迎えのこととお慶びを申し上げます。沖縄県医師会におかれましては、日頃から沖縄県の保健医療施策に対し、ご理解とご協力を賜り心から感謝申し上げます。

また、本日沖縄県知事表彰を受賞された玉城信光先生、知念清治先生、青木一雄先生、誠におめでとうございます。今回の受賞は3名の先生方による地域医療の取り組みや、医師会活動のご功績が高く評価されたものであり、本日表彰させていただきましたのは私としても大変光栄なことであります。

また、沖縄県医師会長表彰を受けられた皆様方のこの度の栄えある表彰に際し、心からお祝い申し上げます。本日表彰を受けられた皆様方が長年にわたって、地域医療に従事され、沖縄県の医療提供体制の充実に、多大なご尽力をいただいたことに対して深く敬意を表すると共に県民を代表して心から感謝申し上げます。今後とも県民の健康増進、地域医療の充実のためお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

さて、沖縄県では沖縄21世紀ビジョン基本計画で掲げる心豊かで安心安全で暮らせる島の実現を目指し、広範かつ継続的な医療提供が必要な5疾病5事業及び在宅医療に関する施策を定めた第7次沖縄県医療計画を県医師会の協力を得ながら、昨年3月に策定し、良

県知事表彰を授与される
左から、玉城信光先生、知念清治先生、青木一雄先生

質かつ適切な医療を効率的に提供するため体制の確保に取り組んでいるところです。

沖縄県医師会におかれましては、第7次沖縄県医療計画の充実を図る上で、重要なパートナーとして、今後ともご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

結びに、本日の表彰を受けられた皆様のより一層のご活躍と、沖縄県医師会のますますのご発展並びにお集まりの皆様方のさらなる飛躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。

くとぅしん、ゆたさるぐとぅ　うにげーさびら。

いっぺー、にふぇーでーびたん。

藤田次郎琉球大学医学部附属病院長挨拶

明けましておめでとうございます。

私は琉球大学医師会の会長をしておりますが、私たちが推薦した青木一雄先生が知事表彰を受けられたことは大変嬉しく思います。知念清治先生は同じ呼吸器内科で10年以上もご指導をいただき、知念先生がこのように知事表彰を受けるのは嬉しく思います。恐縮ですが私も67名の一人として医師会長表彰を受け、関係者の皆様ありがとうございました。

沖縄県医師会では毎週火曜日に沖縄県医師会館で集まり理事会を開いております。私は4年目になりますが、皆さん真摯に沖縄医療の発展のことを考えており、事務局を含めて素晴らしい組織であると感じています。

特に沖縄県医師会が中心となって県立病院群と琉球大学附属病院、群星沖縄研修病院群をまとめて、多くの初期臨床研修医を沖縄に集めようと行動しております。これは他県にはありません。県の協力を得ながら専門医を増やして、研修のための基幹病院が充実すれば、病診連携もうまくいって、玉城信光先生よりお話しがあったように沖縄の医療が日本一になるのではないかと思っております。

私ども琉球大学といたしましては、是非皆さんと沖縄県の医療を支えたいと思っています。県立宮古病院、県立八重山病院も移転して美しくなりましたが、喫緊の課題としては北部に基幹病院を皆さんの力でできればと考えております。琉球大学医学部附属病院でも全面的に支援したいと考えております。

本日は皆様方のますますのご健康と、さらに安里会長をはじめとする沖縄県医師会のさらなる発展と、沖縄県全体の発展を願って高々に乾杯の音頭を取らせていただきます。

その後、琉球舞踊が披露され祝宴が和やかに行われた。

福引で幸運を射止めた方は、22名おられたが、1等賞（液晶テレビ）は東部クリニックの比嘉靖先生、2等賞（ダイソンハンディクリーナー）は安里眼科の安里瞳先生、3等賞（加湿空気清浄機）はてるや整形外科の照屋勉先生であった。

結びに小生より皆様にとって良い年であるようにと祈念する旨の挨拶を行い会を閉じた。

琴演奏会でお出迎え

余興：琉球舞踊

福引き抽選会

平成30年度家族計画・母体保護法指導者講習会

理事　徳永　義光

去る平成30年12月1日に日本医師会館大講堂にて「平成30年度家族計画・母体保護法指導者講習会」が開催され参加した。

平川俊夫日本医師会常任理事の開会宣言の後、横倉義武日本医師会会長（代読　平川俊夫）が全世代型社会保障のなかで、妊娠期から子育てまでワンストップのサポートを目指して行きたいと挨拶があった。

根本匠厚生労働大臣（代読　平子哲夫）からは少子高齢化が進む中、妊娠期から子育て世代まで切れ目ない支援が喫緊の課題であり、平成28年度から子育て支援センター事業を、平成29年度から産後うつ対策事業を進めており、また不妊治療助成事業を継続して行ってゆきたいと挨拶があった。

続いて木下勝之日本産婦人科医会会長からは平均寿命100年時代には産婦人科は少女の時代から女性に寄り添う医療をしてゆく必要があり、ペリコンセプションケアはまさに産婦人科医が目指す方向性であると挨拶があった。

その後「女性に寄り添う産婦人科医療のあり方について」と題したシンポジウムが始まった。

妊娠前から女性の健康課題に寄り添う
ー Periconceptional Care/Counselingにも目を向けようー
平原史樹　日本産婦人科医会副会長
横浜医療センター院長

葉酸摂取や風疹ワクチンの接種など厚労省・日医・産婦人科医会などが既に告知してきた内容も妊娠前の女性には伝わっていない。NIPTも生物学の基本的ルールなどのカウンセリングなしで採血が行われている現状がある。妊娠前の医学的管理の重要性、情報提供を中心としたカウンセリングの重要性を強調。小児科と協力して一緒に女性の思春期・性成熟期へと成育する過程の中で、妊孕性や妊娠時の課題などに寄り添うという産婦人科の診療の新たな責務を果たすことがこれからの時代には必要。

妊娠前からの健康管理についてー若年女性へのメッセージー
甲村弘子　こうむら女性クリニック院長

女性のライフスタイルの変化とともに妊娠出産の高齢化が進んでいる。妊娠前から伝える情報として喫煙・飲酒の危険性、痩せや肥満と周産期予後、内科的疾患と妊娠予後、精神疾患と妊娠予後などがある。BMIが18.5以下の痩せの若年女性が日本では諸外国よりも多く、痩せ女性が妊娠すると切迫早産・早産・低出生体重児が増加する。Developmental origins of Health and disease（DOHaD）という疾患概念も提唱されており、妊娠前からの健康管理が重要である。また思春期子宮内膜症は月経痛を有する例の47％に存在する。この時期から内膜症に対処することが将来の妊孕性にも効果が期待できる。

妊娠前から健康管理について（身体疾患を中心に）
鈴木俊治　葛飾赤十字産院副院長

プレコンセプションケアの重要性；QT延長合併を持った女性が不妊治療をうけ妊娠し、経過を診ていたが、39週で母体死亡した。「慢性疾患や小児期からの疾患を持っている人が妊娠に向けてどのようにすれば最良の経過になるかを考えてゆく」ことが大切。

高血圧に対するプレコンセプションケア　ポストコンセプションケア
循環器疾患に対するプレコンセプションケア
狭窄性病変および頻脈性不整脈 30 週ごろ悪化
虚血性心疾患および徐脈性不整脈は産後に悪化
血栓症に対するプレコンセプションケア
腎疾患に対するプレコンセプションケア　ポストコンセプションケア
糖代謝異常に対するプレコンセプショナルケア
ポストコンセプションケア
HbA1c7％未満（可能なら 6.2％未満）
甲状腺疾患に対するプレコンセプションケア
感染症疾患に対するプレコンセプションケア
(性感染症・風疹)

ゲノム医療時代に妊娠をむかえる世代への妊娠前の遺伝子カウンセリング
齋藤加代子　東京女子医科大学遺伝子医療センターゲノム診療科特任教授

個人のゲノム情報を調べて、その結果をもとに、より効率的・効果的に疾患の診断・治療・予防を行うことが出来る様になってきた（プレシジョン・メディスン）。

母体血を用いた出生前遺伝子検査（NIPT）が実際始まった。出生前遺伝カウンセリング体制の充実が喫緊の課題である。偏見のない多様性を認める社会を構築することが目標。

指定発言－行政の立場から（妊娠前からの就労環境の整備も含めて）
平子哲夫　厚生労働省子ども家庭局母子保健課課長

2025 年問題を直前にして次世代育成サイクル＝成育が重要。そのために「健やか親子 21」計画が遂行中。第 1 次の最終評価を踏まえて「データヘルス時代の母子保健情報の利活用」、「子育て世代包括支援センターの全国展開」、「妊産婦に優しい環境づくり」、「産後ケア事業」、「不妊に悩む方への特定治療支援事業」、「母子保健施策を通じた児童虐待防止対策の推進」の説明がありました。

今後の産科医療に大変示唆に富む講習会でした。今後この理想の産科医療を実際の診療現場で実践してゆくためのシステム作りを検討してゆく必要性を強く感じた。

お知らせ

沖縄県文化観光スポーツ部観光振興課からのお知らせ

インバウンド医療通訳コールセンターの開設について

今般、沖縄県では、外国人観光客の医療問題に対応すべく、24時間365日対応の多言語コールセンター（名称：Be.Okinawaインバウンド医療通訳コールセンター）を開設し、①電話通訳 ②メール翻訳サービス ③医療機関向け相談窓口 をすべて無償で実施しております。

各医療機関におかれましては、是非、有効利用下さいますようご案内申し上げます。

無料
24時間365日対応

① 電話医療通訳サービス
03-6635-0230
※対応言語：英語・中国語（北京語・広東語）・韓国語・ポルトガル語・スペイン語・タイ語

② メール翻訳サービス
okinawa_mi@bricks-corp.com
※対応言語：英語・中国語（繁・簡）・韓国語・ポルトガル語・スペイン語・ベトナム語・タイ語

③ 医療機関向け相談窓口
03-6635-0231
訪日外国人対応における各種問い合わせに対応いたします。 例：他医療機関での未収金対応について教えて欲しい 等

Be.Okinawaインバウンド医療通訳センター
（沖縄県行政支援事業）
医療通訳サービス運営事務局（（株）ブリックス（株）シャイニング）
TEL: 098-868-5230（平日9:30-18:00）/ FAX: 043-332-8868 / Email: okinawa@bricks-corp.com

岸本幸治先生日本医師会最高優功賞受賞
新垣武三先生瑞宝双光章受章
髙石利博先生瑞宝小綬章受章
おめでとうございます。

理事　玉城　研太朗

2018年12月3日ザ・ナハテラスにおきまして、岸本幸治先生日本医師会最高優功賞受賞、新垣武三先生瑞宝双光章受章、髙石利博先生瑞宝小綬章受章祝賀会が開催され多くの皆様にお集まり頂きました。受賞・受章されました先生方大変おめでとうございました。お三方の先生方いずれも、沖縄県の医療の発展にご尽力されてまいりまして、まさしくその業績にふさわしいご受賞（ご受章）ではないでしょうか（若輩者のわたくしが申し上げますのも何なのですが）。まず岸本先生ですが、坂下の岸本外科を知らない那覇市民はおりません。先生にはご自慢の五感をフルにご活用いただき、私ども後輩のご指導を引き続き宜しくお願い致したく存じます。また新垣先生に於かれましては46年もの長きにわたる学校医としてのご活躍（わたくしはまだ2年目ですが）、また地域医療へのご貢献は本当に頭が下がるばかりでございます。髙石先生は北海道でお育ちになり南下南下の末沖縄県で精神保健医療の発展にご従事されてまいりました。タコ糸の切れた凧のようにわが県に流れ着いたお話は大変ユーモアにあふれ、また私ども後輩を引っ張って頂きたく存じます。お三方の先生方を囲み、大変楽しい会となりました。

挨拶

安里哲好沖縄県医師会 会長

本日ここに、岸本幸治先生日本医師会最高優功賞受賞、新垣武三先生瑞宝双光章受章、髙石利博先生瑞宝小綬章受章、祝賀会を開催いたしました

ところ、多数の皆様にご出席頂き、厚くお礼申し上げます。

先生方のご業績は後程詳しくご披露されますが、岸本先生は地区医師会役員として長年に亘り会の発展並びに県民の医療・保健・福祉の向上にご尽力されたご功績により、新垣先生は学校医として長年に亘り、養護教諭並びに教職員と連携の下、円滑な学校保健活動にご尽力されたご功績により、髙石先生は精神衛生事業の推進並びに向上発展にご尽力されたご功績により、それぞれの賞を受賞されております。今回、同時に3名の先生方が栄えある賞を受賞された事は沖縄県医師会の誇りであります。

本県の医療・保健・福祉の歴史を振り返って見たとき、先生方がこれまで果たしてきた役割はいかに大きなものであったかを改めて認識するものであり、ここに先生方の永年のご労苦に対し沖縄県医師会を代表して深甚なる敬意と謝意を表する次第であります。

さて、ご高承のとおり、昨年末都道府県別平均寿命の順位が発表され、残念ながら女性は3位から7位、男性は30位から36位に陥落しました。本会ではその要因となっている、65歳未満の死亡率の高さに鑑み、その原因究明と対策を図り働き盛り世代の健康づくりを目的とした「65歳未満健康･死亡率改善プロジェクト」の事業計画を策定致しました。

県医師会執行部は当プロジェクト達成に向け一丸となって邁進する所存でありますが、その目的達成のためには、地区医師会・沖縄県下の全医療関係者のご協力とご支援が不可欠であります。

岸本先生、新垣先生、髙石先生におかれましても、なにとぞ今後ともその卓越したご見識によるご指導、ご助言を賜り、県医師会の会務運営並びに県民が希求する安心・安全な医療体制の構築にお力添え下さいますようお願い申し上げる次第であります。

結びに、先生方の今後益々のご健勝とご多幸を祈念して私の挨拶とさせて頂きます。

業績紹介

玉井修那覇市医師会 副会長

この度の岸本幸治先生日本医師会最高優功賞受賞に際し、輝かしい数々のご功績の中から主なものを簡単にご紹介させていただきます。

先生は、昭和35年に日本医科大学医学部を卒業後、日本医科大学付属病院、富士宮市立富士宮総合病院、目白病院勤務を経て、帰郷後の昭和48年那覇市内に岸本外科医院を開設し、現在に至るまでの45年の永きに亘り、地域医療、保健、福祉の向上にご尽力されました。

そのような多忙な日常診療にも関わらず、那覇市医師会理事、常任理事、副会長、監事を合計16年余り務められ、地域医療の発展並びに医師会の会務運営にご尽力されました。

中でも、先生が常任理事を務めていた平成5年に那覇看護専門学校を豊見城市へ新築移転し、看護師2年課程の新設に大きな貢献をされました。また、教職員の能力向上のため、県外の研修会、講演会への参加を積極的に行い、那覇看護専門学校の基盤を強固なものとし、今日に至るまで多くの逸材を輩出されております。

また、先生は昭和59年から平成25年までの29年間、那覇市立首里中学校の学校医として学生の疾病の予防健診活動並びに健康診断、健康管理、健康教育、健康相談をとおして疾病の早期発見並びに事後指導に努め、それらの健康保持増進に貢献され、その功績が認められ平成24年に「全国学校保健・学校医大会における日本医師会長表彰」を受賞しております。

現在も定期学校健診にも積極的に従事され、学校医を側面から補佐しております。

我々、後輩の医師会会員に対しても常に優しく穏やかに接して頂き本当に感謝申し上げます。

以上のような岸本先生のこれまでの長年に亘るご功績が認められ、この度日本医師会最高優功賞受賞の栄に浴されております。岸本先生の

これまでの御苦労に対し、改めて深甚なる敬意と感謝の意を表すると共に、今後とも御健勝でご活躍されん事を祈念いたしまして、簡単ではございますが、業績紹介を終わります。この度の受賞、誠におめでとうございます。

山城千秋那覇市医師会 会長

この度の新垣武三先生瑞宝双光章受章に際し、輝かしい数々のご功績の中から主なものを簡単にご紹介させていただきます。

先生は、昭和37年昭和医科大学医学部を卒業され、同附属病院、国立東京第一病院、武蔵境病院にて勤務された後に帰郷されました。沖縄では沖縄赤十字病院での勤務を経て、昭和49年に那覇市内に鏡原外科医院を開設し、現在に至るまで長年に亘り地域医療、保健、福祉の向上にご尽力されました。

その様な日常診療でご多忙の中、先生は沖縄県立小禄高等学校の学校医として、昭和49年4月から現在に至るまでの46年もの永きに亘り、生徒の健康管理、健康教育、疾病予防に努められており、長い間、その親しみやすいお人柄により、気軽に体調管理や健康相談を受けるなど、地域に根ざした良医として慕われています。

特に、学校定期健康診断については、円滑な推進と向上を図るために、事前に学校長、養護教員ならびに教職員と綿密な計画を立て、所見のある学生に対しては、適切な指導助言を行う等、医師の専門的な立場から、学校保健活動に貢献するとともに、保護者に対して生徒の健康教育の啓発に努められております。

更に、先生は那覇市医師会生活習慣病検診センターにおいて、検診での胃部レントゲンの読影医師として永年ご尽力し、がんの早期発見早期治療に貢献されました。

また、胃がん・肺がんの個別検診では、「二重読影」が受託条件となっておりますが、開業医の個人診療所では、医師1名のところが多く、二重読影の実施が出来ないために検診が行えないという状況を解決するため、生活習慣病検診センターで行う「二重読影体制」の構築にご尽力されました。

その結果、個別検診を実施する施設数を増やすことができ、市民の検診受診機会の拡大に繋がり、さらに検診における読影の精度向上にもご尽力されました。

以上のように新垣先生のこれまでの長年に亘るご功績が認められ、この度、瑞宝双光章受章の栄に浴されております。

新垣先生のこれまでの御苦労に対し、改めて深い敬意と感謝の意を表すると共に、今後とも御健勝でご活躍されん事を祈念いたしまして、簡単ではございますが、業績紹介を終わります。

この度の受章、誠におめでとうございます。

上地博之北部地区医師会 会長

この度の髙石利博先生瑞宝小綬章受章に際し、輝かしい数々のご功績の中から主なものを簡単にご紹介させていただきます。

先生は、昭和45年に新潟大学医学部を卒業し、同年4月より財団法人竹田総合病院精神科勤務、昭和47年より国家公務員共済組合立虎ノ門病院内科勤務の傍ら、東京大学精神神経科医局に入局されました。同医局にて沖縄への精神科医派遣を行っており、昭和50年に復帰直後の精神科医不足の解消のため先生は沖縄へ派遣されることになり、同年4月に田崎病院勤務、昭和52年4月には現在の医療法人輔仁会サマリア人病院の初代院長として就任されました。

派遣終了後も県外に戻らず、沖縄の精神科医療を憂いた先生は昭和55年当時医療過疎地であり、かつ精神科医療機関も存在しなかった北部地域に現在のもとぶ記念病院を開設致しました。平成6年には精神医療へのアクセスの更な

る向上を図るため、本島北部名護市にサテライトクリニックを開設し、高齢化の進展にともなう認知症疾患治療の重要性の高まりから平成5年県内初の認知症疾患治療病棟の設置、治療後の在宅復帰を見据え平成10年には介護老人保健施設を開設しました。病院開設以来、今日に至るまで院長として26年余に亘り、本県の精神科医療の充実発展にご尽力頂いています。

また、先生は昭和57年より今日に至るまで、沖縄県警察の嘱託医として36年余の長きに亘り、死体検案業務並びに留置人の健康管理にご尽力され、沖縄県警察本部長・本部警察署長より感謝状が授与されています。

更に先生は、永きに亘り、小・中・高校生の学校医として児童生徒の健康診断・健康管理・健康教育を通して疾病の早期発見並びに事後指導に努め、健康保持増進に貢献してこられました。

以上のような髙石先生のこれまでの長年に亘るご功績が認められ、この度、瑞宝小綬章受章の栄に浴されております。

髙石先生のこれまでの御苦労に対し、改めて深い敬意と感謝の意を表すると共に、今後とも御健勝でご活躍されん事を祈念いたしまして、簡単ではございますが、業績紹介を終わります。

この度の受章、誠におめでとうございます。

祝　辞

砂川靖沖縄県保健医療部 部長

岸本幸治先生、新垣武三先生、並びに髙石利博先生の祝賀会が開催されるにあたり、お祝いの御挨拶を申し上げます。

岸本幸治先生の日本医師会最高優功賞受賞、新垣武三先生の瑞宝双光章受章、髙石利博先生の瑞宝小綬章受章、誠におめでとうございます。

この度の栄えある受賞を、心からお祝い申し上げます。

3名の先生方の業績については、先ほど詳しくご紹介がございましたので、詳細は割愛しますが、岸本先生におかれましては、昭和48年に岸本胃腸科外科医院を開設以来、院長として45年間にわたり診療を行うとともに、那覇市医師会の副会長、監事の要職をお務めになり、同医師会の発展強化に御尽力されました。

また、新垣先生におかれましては、昭和49年に鏡原外科医院を開設以来、院長として44年間診療に携わるとともに、小禄高校の学校医として生徒たちの健康管理に長年関わってこられ、地域医療の向上に貢献されました。

そして、髙石先生におかれましては、精神科医療機関が存在しなかった北部地域において、もとぶ記念病院を昭和55年に開設し、精神科医療の提供を実現するとともに、県警察医や学校医を長年お務めになり、北部地域の医療発展に寄与されました。

先生方には、永年にわたり本県の医療水準の向上に多大な御貢献をいただき、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

今後とも県民の健康増進のため御活躍いただくとともに、これまで培ってこられた豊かな経験を生かして、後進の育成にも御尽力いただきますようお願いいたします。

さて、沖縄県では、広範かつ継続的な医療の提供が必要な5疾病・5事業及び在宅医療などに関する施策を定めた、第7次沖縄県医療計画を本年3月に策定し、良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保に取り組んでいるところです。

本県の医療提供体制の充実にあたっては、県内医療関係者の皆様との連携が不可欠であります。

引き続き、表彰・叙勲を受けられた先生方をはじめ、沖縄県医師会及び県内各医療機関の皆様から、本県保健医療行政の更なる充実に御支援、御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

結びに、栄えある表彰、叙勲を受けられました先生方並びに御列席の皆様の益々の御健勝、御活躍と沖縄県医師会の御発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

謝　辞

岸本幸治先生

本日はお忙しい中、多数の方々にご参加頂きまして感謝申し上げます。

去る11月1日に日本医師会設立71周年式典に行き、最高なる賞を頂きました。この賞を受賞できたのも医師会の先生方・医師会事務局のお蔭だと思っております。

式典当日は、ノーベル医学生理学賞を受賞された本庶佑京都大学特別教授の特別講演を聴く事ができ、非常にいい思い出になっております。また、式典には安里会長・宮里善次副会長・県医師会事務局長も出席頂き、ありがとうございました。

自慢ではありませんが私は五感がまだ機能しておりますので、これからも頑張って行きたいと思います。よろしくお願い致します。

本日はありがとうございました。

岸本先生 表彰状・盾

新垣武三先生

このたび、平成秋の叙勲で思いもよらず「瑞宝双光章」という大変名誉ある勲章を受章する事が出来ました事をこの上なく光栄に思います。

皆様方の御支援を心から感謝申し上げます。ありがとうございます。今回の受章は微力ながら約46年にも及ぶ学校医としての貢献への受章と伺っています。私は東京生まれ東京育ちなのですが、同じ医師だった兄の新垣浄治も沖縄へ移住して早くも50年以上たちました。

ただただ時の経つ早さに驚かされます。当時の沖縄の深刻な医師不足で兄は当時の中部病院院長を恐らく20年位したでしょうか。私は未熟者でしたが、東京国際医療センター（当時は国立東京第一病院）で、約6年間勉強させてもらい、その後、沖縄で開業しました。学校医不足なので、近くの高校の学校医として1人でこなしていました。何百人の生徒をエアコンもない暑い部屋で診察していた日々が今となっては大変懐かしく思い出されます。この学校医の仕事もお蔭様で今では複数のドクターと組んで実施出来る様になり、学校医として何とか46年間継続してこられました。皆様の御支援に感謝する次第です。

平成30年11月12日皇居で行われた叙勲式では、丈の長い黒いモーニングコートを身にまとい娘達に付き添ってもらい式に参加してまいりました。皇居宮殿内の美しいシャンデリアが飾られた大広間である「豊明殿」に通されて今年平成最後となるこの年に全国からの受章者約70人とお逢い出来たばかりでなく、天皇陛下にも私の前でお逢い出来たばかりでなく「元気に過ごして下さい」とのお声をかけて頂いたのは、本当に光栄の一言でした。生涯、記憶に残る大変貴重な出来事でした。

振り返ると50年という期間医療現場に携わる事に私自身にも改めて感謝すると共に、叙勲という素晴らしい章に恥じない様微力ではありますが、精進して参りたいと思います。そして今日も又皆様の心と体の健康を願い、今回の受章のお礼のご挨拶とご報告をさせて頂きました。

本当にありがとうございました。

新垣先生 勲記 勲章

髙石利博先生

本日は、皆様ご多忙の中私達のためにこのような盛大な祝賀会を催して下さり、心より感謝申し上げます。先ほどは北部地区医師会上地会長より過分なご紹介を賜り、又県保健医療部部長よりご祝辞を頂き、改めて叙勲の重みを実感し光栄に感じているところであり、推薦して下さった沖縄県医師会安里会長他、医師会の皆様、又北部地区医師会の皆様に感謝申し上げます。

この度の瑞宝小綬章受章においては、地域で日々出来る事をやってきた私には思いもよらない事で、身に余る光栄であります。私の持ち場の地域精神医療は、医師個人では出来ることではなく、当事者とその家族の自助努力、地域社会の支援、大勢の職員の働き、など総力が無ければ達成できません、そういう意味に於いてはこの叙勲は当院に関わる全ての人達で戴いたものであると誇りに思います。

私事で申し上げますと、旧満州生まれ北海道で育ち、新潟大学卒業時は非入局時代で、先ほど紹介にありましたように、竹田綜合病院・北見赤十字病院･虎ノ門病院と各地で自主研修し、沖縄には昭和 50 年から那覇市田崎病院に勤務致しました。昭和 55 年（1980 年）に本部で精神科病院を開設今日に至ります。

開業に際しましては他府県の出身で医局の応援も無い私に、沖縄での多くの先輩の先生方、とくに田崎邦男先生、友人の皆さまの支援協力を戴きました。北部に開業してからも、本日も来てくださっている金城幸善先生をはじめ、同窓の新垣学先生、精神科仲間の富山祐幸先生達等、保健士の皆様、名前を挙げはじめると切りがありませんが本当に多くの方達の協力支援を戴きました、今日まで長きにわたって地域医療に従事できたことは皆様のご支援の賜物であり、本日のような日を迎えたことに改めて心から感謝する次第です。

大学卒業の時に父を亡くしましてからは糸の切れた凧の態で、北の端からから南の島まで来てしまいましたが、此処沖縄のやんばるの地が一番自分の性に合っており、今の仕事を続けることが自分の使命と思っております。おそらく一生をこの地で子供や孫に囲まれ生活する事になろうと思います。

今回の叙勲と本日皆様の温かい言葉を戴いたことを改めて励みとし、これからも地域精神医療に従事して参りますので、今までに変わらず皆様のご支援をよろしくお願い致します。本日は誠に有り難うございました。

髙石先生 勲記 勲章

懇親の様子